

平成3年の年頭に当たり

ゴルバチョフのペレストロイカと フセインのクエート侵攻

埼玉60生会代表 川島 順

平成2年、1990年はまさに変革の年であった。

ソ連ゴルバチョフの提唱するペレストロイカは始めは半信半疑であったが、自由化の嵐がポーランド、チェッコ、ルーマニア、ハンガリーとあつと言う間に東欧諸国を席卷し、まさかのドイツの統一がかくも早く実現するとは誰もが予想しなかったところであろう。

ソ連共産主義帝国の世界共産革命の野望は夢か幻であったのか。しかし、この余りにも無責任な非人間的な実験は、ソ連人民はもとより近隣諸国にどれだけの迷惑をかけた事か。

そもそも、明治以来我が国が北進政策を取り続けてきたのは、ソ連の極東に対する膨脹政策と共産主義に対する正当防衛ではなかったのか。その選択が間違いでなかったことは朝鮮半島の現実を見れば、多くの説明の必要もなからう。ところが、ある日突然、前非を悔いるのでもなく、都合により今日から自由主義諸国の仲間にはいりましたから仲良くしましょうといわれても、何となく釈然としないのは年寄りの僻目か？ともかくにも、ペレストロイカを断行したゴルバチョフの英断には感服する次第である。

ところが、突如としてイラクのクエート侵攻、これも誰も予想しなかったところである。

世界の悪者とされているフセインにも、歴史的、民族的な視野に立ったアラブの正義がある。それにつけても、大東亜共栄圏の構想に燃えて、結局は世界を敵に回して孤立してきた我が国の苦しい過去の歴史が思い出される。

柄にもなく、国際情勢、政治、経済いずれも門外漢である私が、こんな問題を取上げ、尤もらしく論じるのもおこがましいことではあるが、国際情勢とは全く予想もしない方向に急転回するものであるということ言いたいからである。これは過去の歴史を振り返って見てもその例は枚挙に暇がない。

日本人はお人よしである。外国の他民族のように血で血を洗う略奪の歴史から生残って、来た彼等はなかなかしぶとい、一筋縄ではいかない。だから、ペレストロイカだから戦争は無くなった、防衛も要らない、自衛隊も要らないという単純な主張には賛成しかねる。

少なくともあと何世紀は、丁度明治維新の前には日本の国の中に数十の国があったように、世界には国が存在し、夫々の国の存立のため、またそれぞれの民族の利益のために人類は抗争を続けるであろう。

しかし、いつかは人類の英知が地球国家を建設し、こうなったら国家というよりも家族かも知れない、永遠に戦印のない世界を築くかも知れない。これが正夢になることを、そして今年も良い年であることを祈願して新年を迎えるものである。

(平成3年元旦)